日 本 語 ボ ラ ン テ ィ ア 活 動 報 告

アメリカ：コロラド州立大学

関　益城（埼玉県深谷市）

滞在期間：2017 年 8 月 15 日～ 9 月 30 日
訪問先：コロラド州立大学(CSU) 日本語学科クラス
（アメリカ　コロラド州　フォートコリンズ）
滞在地：203 W, Myrtle Apt. D－3　Fort Collins, CO 80521, USA

種々のご支援と適切な情報の提供をいただき、ありがとうございました。不慣れな海外単独旅行でしたが、お陰様で予定の全日程を終了し、無事帰国いたしました。

活　動　内　容

（1）CSU日本語クラスの授業に参加

マコ・ベーケン先生の調整により、同先生、さゆり・コリンズ先生、およびケイト・キム先生の授業の中から、平日の7回/週をピックアップして授業に参加し、学習支援をした。

日本語クラス風景

（2）各先生の授業を見学

各先生と個別に調整して、自分の空き時間に授業に参加した。

（3）学習進捗遅れ学生への支援

各クラスの中で学習進度が遅れている学生について、各先生からの要請に基づいて、1～2名ずつ1～2時間個別に学習支援をした。

（4）日本語教育行事に参加

①国際交流基金助成グラント（付与）式

8月31日（木）午前10時からの日本語クラスの授業開始時に、平木場弘人デンバー総領事からコロラド州立大学メアリー・ボークル学科長に国際交流基金助成グラント式が行われた。同大学教養学部長、担当の日本語学科3先生、その他の関係者が出席した。

②Colorado Japanese Language Education Association Fall 2017　日本語教育者研修会

9月23日（土）コロラド大学において、コロラド地区の二十数名の日本語教師の方々の研修会に自主参加した。

Portland State University 渡辺素和子先生（博士）の講演があり、また平木場弘人デンバー総領事による来賓挨拶があった。

余　暇　活　動

（1）観光情報

★ 市内観光　市内にはコース別のバス路線が縦横に整備され、低料金でどこにでも行くことができた。ダウンタウンは古い趣のある石造の建物が建ち並び、お土産店やレストラン、地ビールを作って飲ませてくれる店があり、観光客が多い。

中心にインフォメーションセンターがあり、親切に観光情報を提供してくれる他、各種地図も置いてあり、便利である。またメイソン通りを挟んだ西側には古き良き時代の素晴らしい街並みがあり、路面電車も走っていて、散歩に最適だった。

★サイクリング　街中の道路には自転車の通行帯や専用道路が設けられており、安全に走行できるようになっている。交通ルールが頭に入ってからは、アパートに備えられた自転車で日々の買い物や運動が楽しめた。

滞在したアパート（2 階右奥）
前の道路は、定期バスと貨物列車の路線

★ロッキー国立公園ドライブ　交換留学生との交流のため、 CSUを訪問中の香川大学関係一行のロッキー国立公園ドライブに同行させてもらった（全行程9時間）。昔の西部劇に出てくるような赤い岩山の間を抜け、やがてロッキーの山並みと森林の間を疾走するのは気分爽快だった。

ロッキー山系は、カナダからニューメキシコまで南北5000キロ近くに及ぶ大山脈とのことで、今回訪れたのはほんの一部でしかないが、雄大な山々を間近に楽しめる、国内ではなかなか味わえないドライブコースであった。

★パイクスピーク登山（列車）　別の日程で同じ香川大学の一行に同行させてもらった。コロラドスプリングス経由、マニトウスプリングスからいわゆるアプト式の登山列車（コグ・レイルウェイ）で、富士山より高い4,300メートルまで手軽に登ることができた。

車輌は2両編成の短いものだったが、大勢の観光客で満員だった。今回私達はベーケン先生にネットで予約してもらったが、ベストシーズンでもあり、予約なしの乗車は不可能だったと思われる。

隣にはアメリカ人のお母さんと6～7歳くらいの男の子が座ったので、言葉を交わしたり、お菓子をやり取りしながら登った。窓からCSU のマークとなっている大角羊の実物を見ることができて、確かに大学のマークの顔だと実感した。

帰路はコロラドスプリングス地域にある空軍アカデミー（士官学校）の見学者用施設を見学したり、ショッピングセンター（アウトレット）に立ち寄って戻った。

2 両編成の登山列車

（2）Aggie Village Center

毎週月曜日午前中に行われる現地ボランティア（シニア女性）による英会話教室（無料）に参加した。毎回十数名が参加していた。最初に全員が集まり、自己紹介とボランティアとの簡単な会話をもとにレベルを確認して、3グループに分け、和気あいあいと行われた。中国系、東欧系、日、韓、エジプトなどの在住者・滞在者が参加し、正に国際色豊かだった。

（3）日本語クラス課外活動

①花金チャット　ベーケン先生方が主宰し、日本語を話す学生達によるフリートーキング（隔週金曜日午後4時～6時）の集いに参加した。

② バーベキューパーテイ　9月9日（土）昼、市内の市民公園において開催。自由参加で約30名の日本語学習者（学生）と先生方が参加し、懇親会を実施した。この公園はアパートから歩いて10分ほどのところにあり、木立と芝生に囲まれた広い公園で、大きな池と遊園地風のプール、バーベキュー、ゴルフ場等があり、市民の憩いの場所となっていた。

市民公園でのバーベキュー懇親会

③囲碁ワークショップ開催　　囲碁用具3セットを持参して講習会を開催。1回だけの開催でルール習得は難しく、あと数回の機会が必要であった。終了後、囲碁用具はベーケン先生に託した。

CSU での活動の感想

大学風景

大木と芝生と建物のコントラストが見事

★CSUキャンパス

素晴らしい環境の中にあり、ここで学生時代を過ごせるのは、羨ましい限りだと思いました。広い学内に散在する建物はそれぞれ個性的で、中には壁に水を流した建物もあり、周囲や通路沿いには大木の並木があって、長い伝統を感じさせる佇まいでした。

各建物の周囲には必ず駐輪場が設けられ、教室内にスケートボードを持ち込む学生も少なからずいました。これは学内が広いため、次の授業に間に合わせるための対策でもあるようです。中には犬を連れた学生も散見されましたが、どの犬もよく躾けられて、授業に差し障りのあることは一度もありませんでした。

建物と舗装された通路以外は芝生で覆われており、木々の間にはリスが走り回っていました。広い競技練習場の近くには池が配置されていて、鴨がのんびり泳いだり日向ぼっこをしており、公園の中に大学が設けられているような雰囲気でした。

★CSU の学生と学費

学生数は2.5万人と聞きましたが、いわゆるマンモス校と言えるでしょう。学生達は皆、真面目で大人しい印象で、図書館だけでなく各校舎内外の通路やコーナーに机や椅子、ベンチが配置され、多くの学生達がPCを使ったり、本を開いたりしていました。

学費は、州立大学とはいえ年間3～4万ドル（寮費での差）かかるそうで、多くはアルバイトや仕事をしているようでした。

★現地での旅行

フォートコリンズからデンバー、コロラドスプリングスの間を旅しました。いずれも標高1,500～1,600メートルほどの高地に位置していますが、コロラドでは最も低いところでも1,000メートルあるとのこと。

またロッキー山脈の東に位置していることが、気候に大きな影響を与えていると思われますが、聞けばフォートコリンズは年間300日が晴天とのことで、滞在初めの8月中・下旬は暑い日が続き、学生達は半袖、短パンが圧倒的に多く、私自身も半袖・半ズボンで過ごしたため、数日で皮膚がむけるほど日焼けしてしまいました。

雄大なロッキーの山々を背景に

★CSUの国際度

CSUは、様々な地域、国からの学生達が集っており、一々聞くのは憚られましたが、容貌や名前などから、日本よりかなり進んだ多民族社会であり、クラスの中で「アメリカ国籍をとりました」と報告した学生が拍手を送られる場面がありました。

CJLEA(2017秋季日本語教育者研修）での説明では、日本語は中国語、アラビア語と並んで、英米系母国語の人にとって習得にかなり時間のかかる言語だということでした。難しいだけに一月経たない内にギブアップする学生もいましたが、習得のしがいのある言語であると認識して頑張ってもらいたいものです。

★現地に滞在した実感

1月半に及ぶ長期の海外滞在を、しかも宿舎探し以外の全ての準備を自分で行うということは、いつも旅行会社にお任せであった私にとっては、かなり不安なことで、大きな挑戦でした。

私の世代は、TVが各家庭に浸透し始め、アメリカのホームドラマや西部劇などを通してアメリカに強い印象を受けて育ちました。その後もアメリカはさまざまな面で我が国に強い影響を与え続け、常に我が国が目標にしてきた国であったと思います。

今回のアメリカ滞在は、私が現在、関わっているボランティアとつながりがあったことが決断を容易にしましたが、無意識のうちにアメリカに対する強い関心が根底にあったと思います。

★現地の生活の一端

この上ないタイミングで、WSCのCSU情報を得られたのは幸運でした。今回、アメリカで日々の生活のためにスーパーマーケットで買い物をしたり、また期せずして到着直後にCSUの外国語教師の先生方のホームパーティに招かれて、現地の住まいや生活の一端に触れる機会があったり、また他にも売出し中の住宅を見る機会があったりして、アメリカの市民生活を膚で実感できた貴重な機会でした。

むすび

わが国にも外国人生活者が増加しており、観光客も押し寄せていて、好むと好まざるとに関わらず、いずれ欧米の国々のように異文化と直接向き合わなければならない時期が近づきつつあり、我が国の真の国際化のために避けては通れない近未來を見ているように思われました。